

第4回大阪ミモザカフェ：教員評価、均等法前の状況、最近の就職活動

今回ははじめて夜に開催しました。4人の参加者のうち、はじめてご参加くださった方が2人おられ、その自己紹介からはじまり、あれこれと1時間半ほど話し合いました。いくつか話題を紹介します。

大学での教員評価の話から、『日本の科学者』10月号の読書会で笹倉論文での文科省の調査から研究時間が減っているとの指摘との関連が話題となりました。主催者も教員評価を受けた経験はありますが、それによって労働時間が減ったり研究時間を確保できるようになったりした経験はありません。大学教員の多忙化は教員評価では是正できないように思いました。

現代に比べて江戸時代のほうが男女平等で（池田市の酒蔵では女性の戸主が多くて財布を握っていたとか？）、現代のほうが“男だから〇〇、女だから〇〇”という考えがあるのではないかという話もでました。また、1975年の「国際婦人年」、1985年の女性差別撤廃条約批准、均等法成立の前の時代の大卒女性の就職活動の話題では、大学まで男女同じように学び、就職で壁にぶち当たったというお話もありました。文系理系でもかなり状況に差があり、理系女性（薬学部の女性が多かったそう）の就職は良かったが、文学部卒は厳しく、企業が「男性に限る」募集をしたり、省庁の面接を受けても受からず、後から女性の採用がゼロだったと聞いたりしたとのことでした。友人が大卒で就職しても、大卒女性の採用枠がないので高卒扱いされた友人もいたとのことでした。そういうお話を聞くと、今の状況でも以前よりは「改善」しているのだと思います。

最近の学生の就職活動の話題では、「昔」の就活は100社受けるなど考えられませんが、今はそのくらい受ける学生もいます。「今」の学生は「自分の時間」が持てることを重要視し、きちんと休める就職先を探す傾向がありますが、2000年代の初めころから保育・幼児教育の領域では、保育園は勤務時間が長くなるので9-5時の幼稚園のほうがいいという傾向はあったそうです。そこから学童保育、アレルギーや障害のある子どもへの対応、放課後等デイサービス、特別支援教育と分離教育からインクルーシブ教育へ、など話題が広がりました。まだ学校は本当の意味のインクルージョンになっておらず、そもそもクラス当たりの人数を減らして先生を増やすというおおもとを解決しないといけないとのこと。教員志望の学生も減っており、不登校30万人以上と言われ、子どもも大人も学校から離脱している状況で、課題山積です。

さて、次回は、12/25の夜、ちょうどクリスマスですが、ぜひご参加ください。